新書紹介

つくば研究学園都市大事典

つくばファンクラブ編

A5判　一二二ページ　一、〇〇〇円

ある事実に対して、主観的な判断や思い込みを客観的な言葉と形式で表現することがあるが、印刷物にすると客観化の効果は一層増大する。「事典」や「辞典」は、一般的には客観的に見える度合いが相当に高い印刷物である。そして、その客観性ゆえに主観との対応で一般の出版物より「遊び」の幅が広がる。つまり、その解説文章の客観性の度合いによって、「参考図書」（例えば、「世界大百科事典」や「広辞苑」など）から「読み物」（例えば、「悪魔の辞典」（A・ビアス）など）へと性格が変わっていくのである。

この「事実」をはっきり認識したのは、数年前に集英社から出版を開始した「イミダス」という用語辞典の編集にかかわったときであった。「都市」の項目を監修した田村法政大学教授（元横浜市企画調整局長）から、横浜市の職員が参加している「まちづくり研究会」で解説を書いてみないかという提案があって、数人のメンバーが用語の選定と解説文の執筆に参加したのであった。「まち研」では、横浜市の事業を材料に都市問題について幅広く勉強会を行ってきていたので、自分達の知識と情報をまとめてみるのには絶好の機会と思ったからであった。

この編集過程を通じて学んだのは、用語の選定も相当の主観が入ってくるし、（「みなとみらい21」や「まちづくり研究会」などを敢て採用したり）、解説にいたっては基礎的な知識のほかに、横浜市における実例や経験を例示したりして、自治体からの都市計画に対する評価を随所に盛り込んだ。どうしても国の主導による「指導」には批判的な意見が強く、基礎的な客観的な解説に加えて、どこまで現実の問題に対する評価を加えるのかが議論になった。結局、都市計画にかかわる担当者や生活している市民の視点をはっきりさせなければ、あえて用語の解説を自治体職員が行う意味はないという結論に達したのだった。

こんな経験を思いだしながら、「筑波研究学園都市大事典」という小冊子を読むと、編集者達の「つくば」への愛着が伝わってきて大変に興味深かった。これは、もちろん「読み物」としての比重が高い。あいうえお順に並んだ項目では、「つくば」の外の人間では何を引いたらよいのか、わかるわけではないし、「つくば」の中の人間ならあえてこの事典のお世話にならなくとも生活には困らないのである。自分達の「つくば」への愛情を表現し（解説文のところどころにある主観的な表現とこのような事典を出版してしまったという事実で）、たまたまこの「事典」を手にした人にその愛情の一片でも理解してもらおうという意図が伝わってくるのである。

実際に手にした私は、人工的に作られた研究所と大学の街であり、赤提灯もなく、あたたかみのないところと思っていた「つくば」が、人間のすむ街に、しかも「顔」のある街に変身しつつあることを強烈に感じた。

同時に十年前に広報課が足で稼いだ情報をもとに出版して話題になった「ヨコハマウォーキング」を思いだした。この冊子は、ヨコハマというすでに人間が生活し、ほかからの客を迎え入れる街を痒いところに手が届くように紹介し、楽しんでもらうためのものであった。編集もすでに人々が知っているスポットをより深く紹介したカタログ的なスタイルで画期的だった。まだ「つくば」を知りたくて訪ねてくる人は少なく、住んでいる人もようやく勝手がわかってきた街である「つくば」には、このような「事典」スタイルが似合っていたし、これしかなかったのかもしれない。（一九八五年の「筑波科学万博」の時点ではガイドブックが相当数出版されたが）どこからでも読めるし、感心のないところは飛ばして読むという読み方には「カタログ」あるいは「事典」スタイルが最適であるし、特に「街」を研究するのでなく楽しむのなら、このようなスタイルが、「街」の紹介としては理想的な形かもしれない。工場の跡地に建設したような「団地」も、二十年ほど経つと、植えられた木々も大きく茂り、すんでいる住民にもなじみが出てきて、それなりの「街」としての雰囲気を作り出すそうである。「つくば」もこの「事典」によれば一九六〇年代半ばから、「研究・学園都市」としての建設が計画され、一九六九年に「筑波研究学園都市建設法」で国家プロジェクトとして具体化されたとのことである。二十年経って、「街」として愛着を持つ人々が現われたということであろうか。百年経ったときには、「つくばウォーキング」が出版されるかもしれないし、その時は、「自殺問題」や「筑波病」といった項目は消えていることだろう。

〈総務局　国際室　南　学〉

「つくば研究学園都市大事典」の購入の希望は、〒305つくば市筑波学園郵便局私書箱113号「つくばファンクラブ」に葉書か、下記の番号にFAXにて直接申し込んでください。
FAX番号　〇二九八-五二-三七二二